

犬猫幼齢動物の販売日齢に関する科学的知見等について

1. 科学的知見

(1) 犬について（一部の文献中に猫の記載も含まれる。）

「The Domestic Dog - its evolution, behavior and interactions with people」 「犬 - その進化、行動、人との関係」(ジェームズ・サーベル編 森裕司監修 武部正美訳：チクサン出版社)

<主な内容の要約>

- ・ 『不快な刺激も含め、短時間であっても毎日さわって世話をすることが哺乳動物の子の行動的・身体的発達に明らかな影響を及ぼす可能性がある。(Meier, 1961; Levine, 1962; Whimbey & Denenberg, 1967; Denenberg, 1968; Fox, 1978)。』(p123)
- ・ 『Freedmanらの報告では、5頭の子犬を使い、それぞれ2週齢、3週齢、5週齢、7週齢、9週齢時から14週齢まで間、人間に対する隔離を行った実験の結果から、2.5週齢から9 - 13週齢の間がおおむね社会化の堺であろうと結論づけている。(Freedmanら, 1961, p. 1017)。』(p125)
- ・ 『ScottとFuller(1965)は、さまざまな週齢の子犬に、積極的にふれようとする際の反応を調べる実験を行った。3週齢以前では子犬の感覚神経系が社会化を図れるほど十分に発達しておらず、また12週齢を過ぎると見知らぬ人間や場所に対して恐怖心を示す傾向が見られた。しかし、6 - 8週齢の間では見知らぬ人間に近づいたり接触を図ろうとする子犬の社会的誘因(動機づけ)のほうが、元来備わっている用心深さよりも強い。このため、初期の社会化期は生後3 - 12週の間であり、感受期の頂点は6 - 8週の間であると結論づけている。』(p125-p126)
- ・ 『FoxとStelzner(1966)は子犬を使った嫌悪条件づけ(conditioned aversion)の実験結果から、8週齢前後の子犬は精神的・肉体的苦痛に対して敏感になり、また、6週齢から8週齢の頃に子犬を初体験の状況下に置くと、子犬の心拍数と苦悩に満ちた鳴き声を発する度合いが最高潮に達する傾向があるとされている (Elliot & Scott, 1961; Scott & Fuller, 1965)。』(p126)
- ・ 『犬と人間が密接な社会的関係をつくるための理想的な時期は、6週齢から8週齢の間であり、この時期が子犬が同腹犬から離れてペットとしてもらえる最適な時期である。また、できれば8週齢以前から、将来置かれるであろう環境や条件に、子犬を少しずつ馴らしていくことが大切であり、絶対に12週齢を越してはならない。これらの提言に最近、否定的な考えを示している研究者もいる。SlabbertとRasa(1993)は、6週齢で母犬と巣をとりまく環境から隔離された子犬は、12週齢まで母犬と一緒に家庭で育てられた子犬に比べ、食欲不振や体重の減少が認められ、ストレスや罹病率、死亡率が上昇するという報告をしている。』(p127)
- ・ 『Freedmanらは、社会化期に人間との接触が全くない状況で育てられた子犬では、人間を一般的に怖がるようになり、こうなると治すことがむずかしくなると報告している

(Freedmanら,1961;Elliot & Scott,1961;Scott & Fuller,1965)。』(p134)

- Fox と Stelzner(1966)は、実験によって、人間による恐怖心を引き起こす刺激に対して苦痛を過剰に感じる時期はおおむね 8 週齢頃の短い期間であると示している。5 週齢以下では刺激に対する反応はまだ不安定で、嫌悪効果はすみやかに‘忘却’される。一方 12 週齢では刺激に対する嫌悪効果は、社会化の期間中に確立された人間への親和性によって失ってしまう。しかし 8 週齢頃では、刺激に対する嫌悪効果は十分で安定してくるものの、人間とまだ十分な社会的絆が確立されていないため、この時期の子犬は精神的外傷に対して、感受性が高い状態にある。』(p134)
- 『実験結果では、母親、同腹犬、今まで寝起きしていた場所などから引き離されて見慣れぬ場所にひとりぼっちにされると、3 週齢頃から著しい苦痛や困憊の状態（泣き叫ぶ回数を基準にしている）を示すようになり(Elliot & Scott,1961;Scott,1962)、6 - 7 週齢頃がピークとなって、その後は着実に減少傾向を示す。この場合、9 週齢あるいは 12 週齢まで一度も引き離された経験のない犬では苦痛状態が、以前に隔離実験に使われた子犬と比較して、さらに強くあらわれる(Elliot & Scott,1961;Scott,1962)。また別の研究では、6 週齢で母犬から引き離すと子犬の肉体的ならびに精神的健康状態の全般にわたって弊害がでてくるという報告もある (Slabbert と Rasa(1993))。しかしこの報告では、子犬の反応は、とくに母親との離別が原因なのか、それとも今まで寝起きしていた場所からの隔離が原因しているのかについては明らかにされていない。』(p136-137)

(最初のワクチン接種時の年齢)

- 『最初のワクチン接種時期と問題行動の関係について、飼い主にアンケート調査をした結果、8 - 9 週齢以前に最初のワクチン接種を受けた犬では、占有的あるいは嫉妬的攻撃行動、支配的攻撃行動、社会的恐怖心、分離が原因する破壊行動、過剰興奮などの問題行動の発生率が低下していることが分かった。

これについて考えられることは 2 つある。一つは、子犬は普通 8 週齢までに新しい飼い主にもらわれていく場合がほとんどであるため、その場合同腹犬や母犬のそばにいるリーダーのところまでワクチン接種をうけることになる。このような状況でのワクチン接種という経験は、8 週齢以降に接種される場合よりも総体的に精神的ショックは少なく、後の行動に悪い影響を及ぼすこともほとんどないと考えられる。もう一つは、子犬はこのような精神的なショックに対する感受性が高まる時期があることが考えられる。Fox と Stelzner(1966) は、苦痛や困憊をもたらす経験に対して異常に敏感になる時期が約 8 週齢のころにあると実験によって示唆している。8 週齢までに入手した子犬だけに限定して、アンケートを解析した結果、最初にワクチン接種を受けたときの年齢と、過剰な興奮性、攻撃行動全般、分離が原因する問題行動との間には有意な正の一次相関が認められた。』(p142-144)

「Clinical Behavioral Medicine for Small Animals」「動物行動医学 イヌとネコの問題行動治療指針-」(Karen L Overall 著 森裕司監修：チクサン出版社)

< 主な内容の要約抜粋 >

- ・ 『子犬が場所や仲間に対してもっとも強い愛着が生まれるのは6～7週目の時期である。この時期に家や仲間から引き離した場合、深刻な混乱と不安定な状態にさせる影響が最も表れる(Elliot と Scott, 1961)。これは、子犬の製造工場(パピーミル)を廃絶する強力な論拠の1つとなっている。犬を譲渡するのに最適な時期は生後6～7週であると考えているブリーダーやそのように書かれている本もある(Campbell, 1992)が、さまざまな研究によれば、子犬を譲渡する時期としてこれは早すぎる。分離に対する影響が深刻であることと、母体からの抗体が弱まりはじめるのは6～8週であること、くわえて、運搬によるストレスで子犬が病気にかかりやすくなることがあるからである。』(p31)
- ・ 『6～7週齢でのストレスは、子犬の学習能力にも悪影響を与える。子犬は8週半までに、排泄のための素材と場所の好みを形成しはじめることから、トイレのしつけを覚えさせるのに重要なことである。』(p31)
- ・ 『子犬はさまざまな物体に対して、5～9週齢の間に最もよく反応し(Scott と Fuller, 1965)、ブリーダーはリードやハーネスなどを子犬になれさせることができる』(p31)
- ・ 『離乳のころに母親や同腹犬と引き離された子犬は、1分間に多いときで100回の割合で鳴き声をあげる(Elliot と Scott, 1961)。このことから離乳と譲渡は同時に行うべきではない。』(p31)
- ・ 『生後8週半の時点では、人間の手で育てられた子犬は、犬舎で育てられた子犬よりも新しい刺激を探索する。これは、探索行動の発達には刺激が重要であるということを示す。Slabbert と Rasa(1993)は、子犬を生後6週で母親から引き離すと、子犬の身体的健康と体重によく影響が表れることをはっきりと示した。早期の引き離しは人間とのより深い絆の形成を促進してはいないことが示された。実際、早期の引き離しは子犬の身体的健康を妨げていたのである。』(p32)
- ・ 『飼い主は生まれたときから犬をよくならし、できる限り子犬を積極的かつ無害な方法でさまざまな環境にさらすことが推奨される。子犬を3週目までに他の犬と、5週目までに人間とふれさせはじめることはきわめて重要である。』(p32)

「THE WALTHAM BOOK OF DOG AND CAT BEHAVIOUR」「犬と猫の行動学」(C.Thorne 著 山崎恵子, 鷺巣月美訳: インターズー)

< 主な内容の要約 >

- ・ 『社会化期初期はその犬の社会的関係の形成に重要な時期であり、この時期の経験はたとえわずかであっても、その後の行動に長期的に影響を与える。4週齢から7週齢までの間、極めて単純で限定的な環境で飼育された子犬は、普通に育てられた子犬ならば通常避ける有害な刺激に対しても、興味を示して接近する不適切な行動をみせ、さらに単純な迷路をこなすといった能力に劣っている(Thomson と Heron(1954))。また、4週齢から12週齢まで人間に全くふれさせないで飼育された子犬は、人間を恐れ、訓練することがほぼ不可能な状態になった(Scott と Fuller(1965))。これは生後8週目頃を堺に、人間に対する

反応が、接近から回避に移り変わっていくことを表すと考えられる。つまり4週齢から8週齢の間が基本的な社会的な関係が形成される重要な時期であると言える。』(p66)

「The Truth About Dogs」「犬の科学 ほんとうの性格・行動・歴史を知る-」(スティーブ
ン・プディアンスキー著 渡植貞一郎訳：築地書館)

<主な内容の要約>

- ・ 『バー・ハーバーの実験結果では、子犬が人間を恐れなくなるためには、生後3週目に人間と接触するのが好ましく、遅くとも7週目ぐらいまでと、結論づけられている。別のデータによれば、子犬を6週齢で母犬及び同腹犬から引き離すと、その後の健康と社会化に悪影響があることがわかっている。6週齢で子犬を新しい飼い主に移すと、12週齢の場合よりも強い不安感を示し、食欲も病気に対する抵抗力も低下する。』(p88-89)

「BEFORE YOU GET YOUR PUPPY Dr. IAN DUNBAR」「ダンバー博士の子イヌを飼うまえに」(イ
アン・ダンバー著 柿沼美紀 橋根理恵訳：レッドハート株式会社)

<主な内容の要約>

- ・ 『生後8週齢までには、母犬親や同腹犬との間で、犬同士の社会化が十分に進みま
す。よって8週齢に、子犬を新しい家に移してから安全に他の犬と遊べる年齢になるまで
の間は、他の犬とのふれあいをいったん中断しても差し支えはなく、また、新しい家族と
強い絆を築くのに十分間に合う。飼い主が経験豊かで、専門的知識が深く、社会化やし
つけ、トレーニングに長けている場合は、6 - 8週齢で子犬をその飼い主の家に引き取っ
ても差し支えない。』(p56-57)

「犬の行動学」(エーベルハルト・トルムラー著 渡辺格訳：中公文庫)

<主な内容の要約>

(刷り込み時期(4~7週))

- ・ 『刷り込み時期に学ぶべきことを学習できないと、その後、最悪の場合はそれに関連し
た学習能力の一部が完全に麻痺してしまう。この時期に子犬は一生の経験を決定づける学
習を行い、これを逃すと一生取り返しがつかなくなる。例えば人間の臭いを嗅ぐような機
会をまったく与えないと、その後努力しても人間とふれあいが持てず、場合によってはそ
の犬は恐怖による嘔み癖を持つことになる。刷り込み時期に人間の臭いを嗅ぐ機会があれ
ば、自分と同じ「種」の仲間であるという認識ができあがる。』(p43-45)

(社会性を身に付ける時期(8~12週))

- ・ 『8~12週目に子犬は両親の犬との遊びを通じて社会的行動を身につけることから、こ
の時期にこそ、犬と人間の絆を構築しなければならない。』(P60)

「Sunil Kumar Pal(2008).Maturation and development of social behaviour during early
ontogeny in free-ranging dog puppies in West Bengal,India. *Applied Animal Behaviour*

Science, 111(2008)95-107.

- ・インド西ベンガルでの子犬の放し飼いにおける個体間の社会的行動の成熟と発達について

「S.K.Pal(2005).Parental care in free-ranging dogs, *Canis familiaris*. *Applied Animal Behaviour Science*, 90(2005)31-47.

- ・放し飼い犬の保護者によるケアについて

「Angelo Gazzano, Chiara Mariti, Lorella Notari, Claudio Sighieri and Elizabeth Anne McBride.(2008).Effects of early gentling and early environment on emotional development of puppies. *Applied Animal Behaviour Science*, Volume 110, issues 3-4, April 2008, 294-304. 」

- ・子犬の情緒発達における早期馴化と初期環境の影響について

「M.J.Day Immune System Development in the Dog and Cat. *J.Comp.Path.*2007, Vol. 137, S10-S15 」

- ・犬と猫の胎子期から新生子期にかけての免疫の成熟、移行抗体、ワクチンとの兼ね合いについて

「G.Chappuis. Neonatal immunity and immunization in early age: lessons from veterinary medicine. *Vaccine*, Vol.16, No.14/15, pp.1468-1472, 1998 」

- ・CPV、CDV、CAV に対する移行抗体の減少について

「Iida,H., Fukuda,S., Kawashima,N., Yamazaki,T., Aoki,J., Tokita,K., Morioka,K., Takarada,N., Soeda,T. Effect of maternally derived antibody levels in antibody responses to canine parvovirus, canine distemper virus and infectious canine hepatitis virus after vaccinations in beagle puppies. *Jikken dobutsu.Experimetal animals*. Volume 39, Issue 1, 9-19. 1990 」

- ・ビーグルでの CPV、CDV、CAV の移行抗体半減期と各ウイルスへのワクチンテイクが期待できる日齢について

「Pollock,R.V.H., Carmichael,L.E. Maternally derived immunity to canine parvovirus infection: Transfer, decline, and interference with vaccination. *Journal of American Veterinary Medical Association*. Volume 180, Issue 1, 1982, Pages 37-42」

- ・CPV 移行抗体の半減期について

「Trevor Waner, Ami Naveh, Iiana Wudovsky, Leland E. Carmichael. Assessment of maternal antibody decay and response to canine parvovirus vaccination using a clinic-based enzyme-linked immunosorbent assay. *J Vet Diagn Invest* 8:427-432(1996)

- ・パルボウイルスによる結果、母親がしっかり免疫されていれば次第に低下するものの、6週齢と9週齢のワクチンで子イヌの免疫は守れることについて

「2006 AAHA(American Animal Hospital Association) Canine Vaccine Guidelines, Revised」

- ・犬のワクチンガイドライン

「WSAVA(The World Small Animal Veterinary Association) Guidelines For The Vaccination of Dogs and Cats」

- ・犬と猫の予防接種ガイドライン (邦訳)(文献資料1)

子犬における感染症に対する移行抗体価の推移とワクチン接種時期 (mVm vol25 No160 p15 2016/3)(文献資料2)

「NOBIVAC (ノビバック) 技術資料 (三共株式会社)」

- ・4週齢犬に対するワクチン接種の重要性について

「R.V.H.Pollock, and L.E.Carmichael, Maternally Derived Immunity to Canine Parvovirus Infection: Transfer, Decline, and Interference With Vaccination. *Journal of the American veterinary medical association. Vol 180, No.1(1982)*

- ・母犬由来のイヌパルボウイルス感染症の免疫について

「Ian Tizard and Yawei Ni, Use of serologic testing to assess immune status of companion animals. *Journal of the American veterinary medical association. Vol 213, No.1(1998)*

- ・コンパニオンアニマルの免疫状態評価にかかる血清学的検査の効用について

「動物用生物学的製剤一覧」(社団法人日本動物用医薬品協会ホームページより)

(<http://www.jvpa.jp/index2.html> のうち「犬・猫・魚ワクチンの部」)

- ① 「Olli Jokinen, David Appleby, Sofi Sandbacka-Sax ~~rec~~, Tuulia Appleby, c, Anna Valrosa, Homing age influences the prevalence of aggressive and avoidance-related behaviour in adult dogs. *Applied Animal Behavior Science, 195, p87-92, 2017*」

・譲渡時の年齢が成犬の攻撃及び回避行動の発生率に及ぼす影響について (文献資料3)

- ② 「L. Pierantoni, M. Albertini, F. Pirrone, DVM Prevalence of owner-reported behaviours in dogs separated from the litter at two different ages. *Veterinary Record, October 29, 2011*」(文献資料4)

・2つの異なる年齢で同胎犬から分離された犬の飼い主により報告された行動の発生率について

- ③ 「Overall KL, Interventions for early puppy and kitten trauma and neglect. *Advances in Small Animal*

Medicine and Surgery, 30(3), 1-3, 2017, (文献資料5)

・早期に分離された子犬及び子猫の心的外傷と放棄への介入について

- ②4 「Franklin D. McMillan, Behavioral and psychological outcomes for dogs sold as puppies through pet stores and_/or born in commercial breeding establishments : Current knowledge and putative causes. *Journal of Veterinary Behavior* 19, 14-26, 2017」 (文献資料6)

・ペットショップを通じて販売され、さらに/または、商業的な繁殖施設で生まれた犬への行動的・心理的な効果について

- ②5 「Susana Le Brech, Marta Amat, Tom s Camps, D lora Temple, Xavier Manteca, Canine aggression toward family members in Spain: Clinical presentations and related factors. *Journal of Veterinary Behavior* 12, 36-41, 2016」 (文献資料7)

・スペインでの家族に対する犬の攻撃性について

- ②6 (UCDavis School of Veterinary Medicine) Book of Dogs:A Complete Medical Reference Guide for Dogs and Puppies 73-74 頁 (文献資料8)

- ②7 The Perfect Puppy:Gwen Bailey 34-37 頁 (文献資料9)

- ②8 ドッグズ・マインド (Dog's Mind) (ブルース・フォークル著 山崎恵子訳、増井光子監修：八坂書房) 第6章早期学習

(2) 猫について

「ドメスティック・キャット 猫 その行動の生物学-」(デニス・C・ターナー パトリック・ベイトソン編著 森裕司監修 武部正美 加隈良枝翻訳：チクサン出版社)

<主な内容の要約>

- ・ 『Karsh は実験で、人に対する社会化の感受期は子猫が生まれて2～7週の間であることを示した。』(p272)
- ・ 『子猫は一般的に、ハンドリング(人間にならすために抱き上げること)時間が長いほど、人に対して友好的になる。ほとんどの実験結果から、社会化された子猫は1日30～40分間のハンドリングを受けていたことがわかった(Karsh,1983b;Rodel,1986;Karsh & Turner,1988)。しかし、ハンドリングは1日およそ1時間まででそれ以上は劇的な効果は期待できないようである(McCune, McPherson & Bradshaw(1995))。』(p272)
- ・ 『分娩直後に初乳が得られなかった子猫の場合に、母猫からの受動免疫の移行が低減するという問題がある。母猫から子猫への移行免疫は出産前にもかなり認められるが、移行免疫の主役は分娩当初の1、2日間に出る初乳である。生まれたばかりの子猫が授乳後期の雌猫から母乳をもらったため、この初乳を飲みそびれてしまった場合、実際に本当に問題があるかどうかについては調べる必要がある。残念ながら、猫の初乳とその後の母乳に

含まれる免疫グロブリンならびにその吸収具合に関しては、まだ十分な情報は得られていない。』(p68)

「Clinical Behavioral Medicine for Small Animals」「動物行動医学 イヌとネコの問題 行動治療指針-」(Karen L Overall 著 森裕司監修：チクサン出版社)

<主な内容の要約>

- ・ 『生後2週で人工的に母親から引き離された子猫は、他の猫および人間を恐れ、攻撃行動をとるようになり、でたらめに動き回り、学習能力が低い(Bacon,1973;Seitz,1959)。こういった子猫は他の子猫に社会的愛着をもつことはできるが、そうなるには時間がかかる。』(p66)
- ・ 『生後45日間、定期的に人間に扱われていると、4～7か月齢ごろにその猫は人間に触れていない子猫よりも、見知らぬ物体により早く近づき、長い時間過ごすようになる(Wilsonら,1965)。ハンドリングを受けたネコのほうが、開眼時期、巣を離れる時期、その猫特有の毛色があらわれる時期が早く、ハンドリングは発達の早さに影響を与えているようだ(Meier,1961;MeierとStuart,1959)。出産後から5.5～9.5週まで、5人の人間に扱われた子猫は、1人だけに扱われた猫、あるいはだれにも触れられなかった猫に比べて、人間に対する恐怖心が少なく、人間とよく遊び、人間に対して親愛的である。このような子猫はのどを鳴らすことが多く、体をより多くこすりつけ、一緒に遊んでいる人間をなめる。

このような影響は、人間以外の動物にもあてはめることができる。Fox(1969b)は、生後4週からチワワの子犬に触れあわせた子猫は、12週になってチワワに対してまったく恐怖を示さないことを明らかにした。子犬に接触したことのない子猫は、12週になっても子犬が近づくと、避けて、防護的な行動をとる。』(p69)

- ・ 『異なる時期(1～5週、2～6週、3～7週、4～8週)にハンドリングされた子猫の、ハンドリングに対する影響を調べた実験では、2～6週および3～7週の期間に人間の手でハンドリングされたネコがじっとしている時間の平均スコアは、1～5週および4～8週の猫よりも有意に大きかった。』(p70)

「Feline Behavior 2nd A-Guide for Veterinarians-」「猫の行動学 行動特性と問題行動-」(Bonnie V.Beaver 著 斎藤 徹 久原孝俊 片平清昭 村中志朗監修：interzoo)

<主な内容の要約>

- ・ 『1匹で育てられた猫に比べ、ほかの子猫とともに育てられた猫は、単独でいる状況ではストレスを受けやすい。同腹猫とのふれあいの欠如は、社会的コミュニケーションを学べないことになり、社会的遊びに際して過度の反応を示す。とくに2～4週齢の子猫では、見知らぬ環境下において、同腹猫とのふれあいが不安を静めるのに重要である。』(p154-155)
- ・ 『生後2週間以前では差は出ないが、以降に人の手に触れられた子猫は、少なくとも7週齢頃までに触れられなかった猫よりも人に対してよく反応する。』(p165)

- ・ 『猫の社会化に要する正確な時間は知られていないが、おそらく情緒的な反応の発達とともに始まり、忌避をおこさせるような刺激への恐怖反応の発達とともに終わる。つまり社会化の時期は5～7週齢を中心に、おそらく2～9週齢の期間に起こる。この時期の特定の人に対する長期の社会的なふれあいは、ある種の絆を形成することもある。』(p166)
- ・ 『母猫から子猫を引き離すときの反応からわかるように、子猫は最初の数日で母親に対する刷り込みが起こる。早い時期のふれあいも早期の社会化を確実にする。3～6週齢が種間の社会化にとって最も重要な時期と思われる。』(p166)
- ・ 『正常な社会化を経験していない子猫は、成長してから普通と異なる行動をみせることがある。5週齢以前に母猫から引き離された子猫は、ほかの猫と十分な社会化がされないこともあり、人に過度にまとわりつくようになる。このような猫は成長するにしたがって、ほかの猫への攻撃性や自傷などの異常行動を示すことがある。また、ほかの猫や子猫を同種であると認識していないため、交尾や母性行動に悪影響をおよぼす。遊び仲間をもたずに成長した子猫は歯や爪の正しい使い方を学習していないこともある。こうした子猫は人に対して臆病または攻撃性を示すようになり、ペットとして受け入れ難くなる。8週齢までに人間を含む他の動物種に対して十分なふれあいがなかった場合、他の動物がいない環境を好むようになり、たとえば大勢の人間や犬などがいる社会的な状況においてストレスを感じ攻撃性を示すことがある。』(p181-182)

「Milla K.Ahola, Katariina Vapalahti, Hannes Lohi, Early weaning increases aggression and stereotypic behaviour in cats. *Scientific Reports*」(文献資料10)

・ 早期離乳による猫の攻撃性及び常同行動の増加について

2. 国内の規制

2市の条例で、犬猫の飼い主の遵守事項として、「生後8週間は親子を共に飼養してから譲渡するよう努める」旨規定されている。 罰則はなし。

- ・ 札幌市動物の愛護及び管理に関する条例(平成28年10月1日施行)
- ・ 三郷市動物の愛護及び管理に関する条例(平成29年12月1日施行)

動物愛護管理法の施行状況について（全国 115 自治体への施行状況調査結果より抜粋）

Q. 幼齢の犬又は猫に係る販売等の制限について、課題がありましたら記載してください。

A. （ ）内の数字は自治体数を示す。数字がない項目は 1 自治体。

販売日齢の課題

- ・業者側の書類だけでは生年月日の担保が不十分、不正があっても指導できない（19）
- ・日齢に応じた身体的特徴など、判断する材料が必要（2）
- ・57 日齢以上を指導するうえでの科学的根拠が必要（4）
- ・幼齢な動物を好む社会全体の意識改革が必要（3）
- ・動物取扱業者に販売日齢規制の意味などを理解させることが重要（2）

販売日齢を延ばすと悪影響が懸念される

- ・パピーミルなどでは不適正な飼養期間が延びるので、適切な社会化にならない（2）
- ・過度の制限は、個体情報の台帳の改ざん等、かえって悪質化するのではないか

販売日齢以外の規制等が必要

- ・十分な社会化を意識した親等との飼養がされているかの確認が必要
- ・繁殖施設への立ち入り制限等の措置が必要
- ・近親交配の規制が必要
- ・個体差があるので、個々の動物の状態を配慮した上で、適正に取り扱うことが重要（2）
- ・犬種ごとの検討が必要（複数の日本犬繁殖業者から、40 日以上母犬と同居させると母犬が傷だらけになるとの相談がある）
- ・犬猫の販売の際にあらかじめ親犬猫を見せるなど、親の性格を知った上で購入してもらった方がよい
- ・購入者（飼養者）の住居，年齢等といった適正飼養・終生飼養に係わる部分の確認をどのようにするか課題
- ・展示業でも幼齢規制が必要（幼齢個体のふれあい体験、幼齢個体のテレビ出演等）（2）
- ・犬猫等健康安全計画の修正（登録事項の変更）が必要

Q. 幼齢の犬又は猫について、自主的に 57 日齢以上で販売している事例を把握されていたら、記載してください。

A.

- ・ 生後 60 日齢までは親兄弟と飼養し、60 日齢以上を販売（37）
- ・ 管内において、生後 57 日齢以上まで親犬とともに飼養する事業者が 15 以上確認された。ペットショップ等への卸売りを行わず、個人向けの販売のみを行うブリーダーが多いと思われる。（28）
- ・ 猫の販売業者で、病気が発覚する可能性が上がるため、販売契約は 70 日齢以上、引渡しは 90 日以上に限定している業者を把握している。（6）
- ・ 生後 2 か月を目途に販売しているブリーダーがいる（4）
- ・ 生後 2 ヶ月時にワクチンを接種し、簡単なしつけを行った後に引渡しを行う。（2）
- ・ 生後 60 日を目途に獣医師による健康診断を受け、問題がなければ初回ワクチンを接種し、副作用等のないことを確認した上で販売している。
- ・ 幼齢動物の社会化等のため、2 ヶ月未満では販売しない、とのこと。
- ・ 猫専門で 1 業者あり
- ・ 検診後、トイレしつけ後、ワクチン接種後約 10 日様子見後など
- ・ 犬猫安全計画に多数の業者が記載
- ・ 事例はあるが、具体的な日齢の記録はない。
- ・ 80 日齢以降での引き渡しをしている業者がいる。社会化の期間を十分に確保するためとのこと。

平成 28 年 9 月 1 日から、生後 49 日齢を経過しない子犬・子猫を繁殖業者が販売したり、引渡したりすることが禁止され、罰せられることになりました。繁殖業者の方は正確な生年月日を申告してください。ペットパークでは検査官が厳密なチェックを行い、法令遵守の徹底に努めます。

子犬の生後日齢の確認は門歯の生え具合を基本に 以下の3項目をチェックします

① 門歯の状態

門歯の生え方からおおよその日齢を推定することができます。個体差がありますが、『乳歯が生える時期』は、犬歯が生後 20～30 日、第 1～2 切歯（門歯）生後 30～35 日、第 3 切歯（門歯）生後 35～45 日、第 2～3 前臼歯生後 30～35 日、第 4 前臼歯生後 35～45 日といくつかの文献で解説されています。

ただし、流通現場では、

A. 生後 45 日を経過して犬歯は生えているが門歯は歯茎よりやや白く見え始めている

B. 生後 50 日を経過しても犬歯も生えていないし前歯が出る様子すらない

というケースに遭遇することがあります。

A のケースに該当する犬種は、『トイ・プードル』『シュナウザー』『ヨークシャ・テリア』など、B には『マルチーズ』などが当てはまります。日本国内では小型犬種が流通の主流であるため、こうした状況も多く見受けられます。また逆に、レトリバーや柴犬、ウェルシュ・コーギーなどのように、生後 35 日頃には犬歯や門歯が生え揃ってしまう犬種もあります。そのため、見た目からもチェックしやすい門歯の確認を基本としつつ、以下の2項目のチェックポイントを設定しました。

② 毛の伸び具合および体の発育具合

中・長毛種においては、生後 40 日未満と生後 45 日以降では毛の伸び具合に違いがあります。例えば、『トイ・プードル』では生後 35 日頃は顔の毛だけでなく全体的にも毛の伸び具合は未熟な感じを受けます。しかし、生後 45 日を経過して 50 日頃になると、目が隠れるほどマズル周囲の毛も伸び、目元や顎のラインなどをカットすることも容易になってきます。

③ 歩行の状態

ほとんどの犬種は生まれてから 3 週間ほどは産箱のなかを這いずり回り、母犬の乳を探しては飲んでいました。四つ足で立ち上がりスムーズに歩いて乳を飲むことはなく、生後 3～4 週齢頃の犬は立ち上がっても後肢に力が入っていません。また、生後 30～35 日齢でも後肢に力強さがなく、歩行や走り方にはまだ安定感はありません。

中～大型犬のように早い段階から門歯が生え揃う犬種でも、こうした歩行の状態から生後日齢を推しはかることができます。

※円滑に一般のお客様へ販売ができるように、出荷される一週間前には聴診などの診断を済ませ、子犬に混合ワクチンを接種しておくことをペットパークでは推奨しております。

※プロフェッショナル同士の取り引きであるため流通に適正と判断できない個体は出荷することをペットパークではお断りしております。

必ず
お守りください

犬猫の引き渡しは

※
50
日
齢
から

※生まれた日は 0 日
齢でカウントします

犬猫の健全な流通を検討する 3 団体会議

一般社団法人全国ペット協会 一般社団法人ペットパーク流通協会 中央ケネル事業協同組合連合会